

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	勝本 敦洋
2. 審査委員	主 査： 兵庫教育大学・教授 森山 潤 副主査： 鳴門教育大学・教授 菊地 章 委 員： 兵庫教育大学・教授 小山英樹 委 員： 兵庫教育大学・教授 森廣浩一郎 委 員： 兵庫教育大学・教授 永田智子
3. 論文題目	ものづくり学習における児童・生徒の発達段階的な特徴を踏まえた題材設定方略の検討
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻生活・健康系教育連合講座 勝本 敦洋 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時： 平成30年2月3日（土） 14時00分～15時00分          場所： 兵庫教育大学 神戸ハーバーランドキャンパス 講義室2</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>本研究の目的は、ものづくり学習における小学校と中学校との連携(以下、小中連携)に向けて、児童・生徒の発達段階的な特徴を踏まえた題材設定方略を提案することである。ものづくり学習における構想設計学習の重要性、ものづくり学習における小学校図画工作科(以下、図工科)と中学校技術・家庭科技術分野(以下、技術科)の連携の必要性に関する先行研究を整理し、1) 児童・生徒のものづくり学習に対する発達段階的な特徴の把握、2) 小学校段階における技術的な学習活動のフレームワークと題材設計方略の構成、3) 小学校段階で普及可能なものづくり学習の実践モデルの提案の3点を研究課題として設定した。</p> <p>これらの研究課題に対して、まず、小学校5年生～中学校3年生(以下、小5～中3)の児童・生徒を対象とした横断的調査によって、構想設計・製作意欲の形成に関する学習適時性について検討した。その結果、構想設計・製作意欲の形成に対して、小5では道具興味の影響が、小6では材料興味の影響が、中1～3では工夫志向の影響がそれぞれ重要であることを明らかにした。また、構想設計学習に対する児童・生徒のレディネスと発達段階的な特徴について検討した。技術科履修前の中1を対象に、初期構想スケッチ課題を用いた調査を実施し、初期構想力の類型化を試みた。その上で、小5～中3を対象とした横断的調査によって、各学齢における類型の構成比率を検討した。その結果、児童・生徒の初期構想力には、①初期構想時の思考を論理的に構成できる「</p>

論理的構成型」，②思考は不十分だが，経験的にある程度の初期構想ができる「経験依存型」，③思考が適切に表現できず，イメージのみが先行する「イメージ先行型」，④面白みのあるアイデアを発想するが実際の製作を想定しない「空想型」の4タイプが存在し，小5から中3に向けて，「空想型」から「イメージ先行型」，「経験依存型」，「論理的構成型」へと推移していく様相が把握された。

上記に得られた児童・生徒の発達段階的な特徴とStandards for Technological Literacyの概念，我が国の図工科と技術科の目標，内容，小学校等教員を対象とした意識調査の結果とを照らし合わせ，小学校段階のものづくり学習に必要な学習活動のフレームワークを検討した。その結果，ものづくり学習における小中連携を意図した題材設定方略として，①既存の造形題材をベースとし，図工科の造形作品に改良を加える題材（題材Type1），②既存の造形題材をベースとし，図工科の造形作品に材料・道具体験を加える題材（題材Type2），③初歩的な技術的ものづくりの要素を含み構想設計のプロセスを学習する題材（題材Type3）の3タイプを提案した。

提案した3つの題材についてアクションリサーチによる授業研究を実施したところ，児童の製作物に対する機能や構造，実用性を重視する意識，材料や道具に対する興味，構想設計への興味と重要性の認識，ものづくりによる問題解決への意欲等が向上する効果が得られ，これらの題材が小中連携を意図したものづくり学習として利用可能であることが確認された。

## 2. 審査経過

本論文は，ものづくり学習の小中連携に向けて，児童・生徒の発達段階的な特徴を踏まえた題材設定方略を提案したものである。そのための基礎研究として本論文では，小学校5年生から中学3年生までの児童・生徒を対象とした調査を実施し，構想設計・製作意欲の形成に関する学習適時性，レディネスとしての初期構想力の推移について検討している。その結果，小学校5，6年生時の道具体験，材料体験，中学校段階での工夫体験がそれぞれ学習適時性の観点から重要であることを明らかにしている。また，小学校5年生から中学校3年生に向けて初期構想力のタイプが，「空想型」から「イメージ先行型」，「経験依存型」を経て「論理的構成型」へと推移することを明らかにしている。これらの発達段階的な特徴を踏まえ本論文では，小学校段階のものづくり学習が具備すべき学習指導の要件を抽出し，具体的な題材設定方略を提案している。そして，提案した題材設定方略に基づく3つの実践を小学校図画工作科におけるアクションリサーチによって実施し，その学習効果を検証している。このように本論文は，現在，我が国において中学校にしか位置づけられていない技術科の学習に対して，小中連携の観点から，ものづくり学習に係る児童・生徒の発達段階的な特徴を明らかにしている点には，独創性と発展性がある。また，その知見を踏まえ具体的な題材設定方略を提案している点には有用性が認められ，今後の教育実践の発展に大きく貢献するものと期待できる。

## 3. 審査結果

以上により，本審査委員会は勝本敦洋の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し，全員一致で合格と判定した。